

911.56-H76-3ㄅ



1200500756624

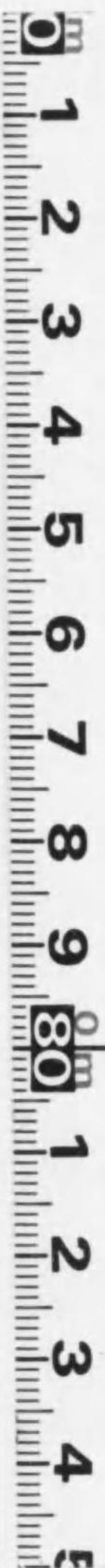
911.56

b

2

本 定
地 荒 崖 懸

三 修 山 菱



始



423

911.56
H.76
3



集詩三修山菱



社磁青



928
44

詩
集
懸
崖

懸

崖

夜
明
け



私は遅刻する。世の中の鐘が鳴ってしまったあとで、私は到着す
る。私は既に負傷してゐる。……

物の本

夕^{ゆふ}が来て、高い松の木のほとりに蟬のみがかすかに啼き残る。閉ざされた晝の本。ひとは讀書に草臥れる。暗い文字のなかに休む海。ひとよ、私のなかにも暮れかかる海が在る。そこに遊んでゐる乏しい鷗共。彼等は羽搏^{はば}きながら啼くが、啼きながら血を咯^はくが。…あはれに私にそれが見える。私にそれが見えない。

身をおこせ、私は起きる。手に重い私の本。

雲

私の十五歳はあの一ちぎれの雲の裏に、何か索しはぐれてゐた。
私の十七歳はあの裏に、何が在るかを探ねなかつた。ただ考へてゐ
ただらう、眞つ白い鳩が三羽ぐらゐ、翔び出しはしないかと。あの
雲の休んでゐる向うから。

けれども、けふ私はあの雲の表に好きな Décors を作らうと、た

だそれだけ考へる。そのなかで悠々と私が殺される前の Décors を。
あのすさまじい Décors を。

病
氣

私の癒らない病氣がいまは私を支へる。私の感歎は人と邦とを離れて、いつかただあの太陽にのみ注がれてゐる。その眩い日差しの中に、私の過去は灼きながら消え去つた、厥のとき一瞬の私の不在。

私の不在。けれども私は知つてゐる、この時間がまた私を縛るて

あらうと。

敗
北

私の考へることが私に應へる。身の上のことのみ考へるのでもないのに、私は瘦せる。私の皮膚からはギリシヤが逃げる。ロオマが逃げる。私は倒れる。私の机のスタンドは灯を消す。夕方が翌朝になつてゐる。

私は知つてゐる。誰が何處で私を殺すか。

冬

午後、居間に火を入れて机に向つた。すると、私は感じ始めた、居間の温度が私の体温と均ひとしい、と。

いけない。いけない。それはいけない。私はガス・ストーヴの火を消して、また机に向つた。そして沁々思つた、私には体温がある
と。

待
つ

雲で掃かれた空の向うに、そこに何の嘘もない。夕焼けがする。私は熱を病む。私は咳をする。次第に乾いてくる苦い口唇に、そこに何の秘密もない。植込は日毎に荒れ、そこで私は母を待つてゐる。敷居を越して、まだ何にも始つてゐないのに、凡てはとうに終つてゐる。私はもはや私を知らない。けれども、何が何故このやうに私

を呼ぶか？ 枯れた木の葉が人の手に落ちる。

鴉

冬が終る。そこに誰かが立つてゐる。鴉が遠くて啼いてゐる。私は荒い日差しのおかげで、足を引き摺つてゐる。

彼等は晴れた空のなかにたくさんの巢を作つてゐる。彼等はまた濕つた砂地の上にたくさんの栖居すまゐを作つてゐる。——私には、ただ

私の死後のしづけさが動いてゐる。

私の身仕度。——植込の草花は、みんな長い頸が折れて、みだれた添竹そだけの向き向きに枯れてしまつた。

冬の歌

日は次第に小さくなる。天の何處かで、自分だけ明るくしてゐる。木の影はだんだん太る。枝先から枯れると、縮まつた枝はぼつりぼつりと落葉の上に積る。おもはず、日差しを索すと、どの林のなかでも高い梢に少しばかり神々しく覗いてゐる。寂しさを繰り返し、繰り返し、私は墮ちた天使を感じてゐる。年月と共に次第に消え去

るギリシヤ。この苦患より遙かに遠ざかり、ただ頑な欲張りとなり、人々の噂ばなしにも耳を藉さなくなれば、人はたぶん幸福だらう。しかし日と共に送る愚かな冬。誰か、この人に再び無智の強さを持つて来てくれるものはないか。――

極北の人

その「問」が私の身を立たせた。

その「答」が私の歩を拂つた。

冬のなかに私がある。私のなかに沙漠がある。沙漠に音の無い日
差しが溢れてゐる。

「ジャンよ、世界はこのやうに造られてゐる。」

極北の人は去つた。

私は再び昂然と身を起した。

轉
身

私は私の影を斷乎として否定する！ 否定の背後に繼起する日没の瀑布！ 私は私を送り、私を迎へる。數多肉親等の埋葬を前にして。

24

私の血液と皮膚の、——私の倫理が終る、その涯の魚の骨、それ

はひとをあの沈鐘の夕暮れに招く私の宿命ではないか。

私の内に旋轉してゐるペルトン・フィール、その既定きていの中心から私の仕種しぐさ、私の身振りを切り裂く一ふりの刃やいば。

私の生の論理は既にそれ自らの行衛を知つてゐる！

25

懸崖

私は廿一歳、私は頬に手をあてる。私は耳朶みみこぶに手をあてる。私は廿一歳、私は理解してゐる、空腹は斷崖だ、と。詩は空腹だ、と。

私は十三歳ではない。あれから私は一人の畫家みかの夫人に口唇と頬とを奪はれた。そして聞き分けのよい耳を。私は十三歳ではない。

過去の聖橋をとつくに踏み越えた。あの小さな、自分だけ明るくしてゐる冬の太陽を向うにして、背せにして。

私は廿一歳、私は温容と従順とから一つ敷居を越して來てゐる。私は確信と先見と、少し大き過ぎる願望とて、詩を書く。世界史の一部を書く。そして、つまり、喉を締める、あの斷崖の詩を、三百六十五羽の鳩と戯れながら、飢ゑながら。

計
報

暮れ方が私の肩の上に外套を投げていった。私は振りかへる。人が戸口に立つてゐる。

私は一通の手紙を受け取る。私はひきかへす。戸の裏へ、影が私を吸ひ取る。私は居間へ這入る。私はマッチをさがす。マッチの火から、書架と梯子とストオヴと、秩序が一瞬左右に動く。

私はスタンドのスイッチを捻る。私は坐る。私の呼吸の外を、河が流れてゐる。私はペン軸を噛む。たうとうお前は死んだと。私は眼を閉ぢる。けれども、私はとつくの昔に死んでゐると。

卻
く

夕方、脚を片方失つた雀が目近まぢかにある樋竹の中に滑り落ちて來た。私は庭下駄を引き摺ずつて、こはこは手で攫つかむ位置をとつた。私はやさしくこの小さな生きものを撫なつて遣りたかつた。前躰まへみになつてみると、私は思はず喉佛を高めてしまつた。

——何故、私の眞似をする！と。

私は廊下を抜けて、さつさと机の傍そばに歸つてきてしまつた。何か、背後うしろから急いそきたてられて。

夜の
手

佐和。佐和。いまも私はそれを呼ぶ、暗く、こゑなく、さわがしく。かうして私のこころはお前に近づき、かうしてお前から卻しりぞいてゐる。離合のはかない夢をつれて。それにもうお前はこの日の下にはゐない。

夜を明かして、寒いベッドの傍そばで私はお前の手を執とつた。凍つた

ものが私の手の中に残つた。その夜のランプはまだ私の本棚の上にある。その夜の手を、私はまだ自分の手の中に握つてゐる。

私の前で、既にこの世は終りかけた。私は強かつた。私は泣かなかつた。私の肱うでの下で、ほんやりと夜は明け、日は暮れていつた。

骨と灰とは地の下にある。それにもまして、何かが私を妨げる。

佐和。お前の呼名よびなの中から、もはや昔の、あの強い人は生れない。

時
間

けふもまたそれが私の身に起る。それは私のなかにただ一人の人を残す、すなはち、懸崖に沿うて遅々として立ち去る影。

悲しみはこれを春秋に切ることには出来ない。私はそれによりかかり、その周期を記しとどめるだけである。私の前で、時間はただ回轉してゐる。悲しみの中心を措いて、その周圍を回轉するだけであ

る。

私は薄ら明りのなかで、夕暮れの寢臺の下に跪く。私の意思を超えた、鋼のやうに不逞な楚囚の一形式。その規則が私の不規則を縛る。それはいつか私を噛み、私を踏み、私を追ふ。行衛も知らず追はれる人。行衛も知らず追はれる人。

一週間が過ぎる。私の荒地は日差しをその涯まで移していった。

私は私を失ふ。また一月が過ぎ去つてゐる。夜明け、私は寢臺の上
に、妨げなく悲しむために取り残される。悲しみ それは私に這入
ると、その姿を違へて来る。またしても私を尋ねて戸を叩く人。實
體のない、影の人。

私は壁に沿うて身を起す、このやうに私の手に血が附いてゐる。

寢室の窓の葛にカアテンは破れて落ちてゐる。私は見る、夜明けの
日没を、ああ、夜明けの日没を。

「影」の話

私には凡てが見える。しかも何にも見えない。

ポオル・ヴァレライ

私は日の暮の往還にいつか歩を移してゐた。絶えず私の前にあつた影は次第にあと退りしりぞをした。それは私を措いて、徐々に裂け、やがて地表の下にひとつの全體となつて没していつた。

日の暮は私にいつも暗い夜明けとして現れてゐる。——私の口唇は私の外にありありと一人の私を噛んだ。私は歩を停めた。薄暗い

なかを鴉が一羽啼かずに翔たんで過ぎた。私はまたそのやうにずんずん暗いなかに沈んでいつた。

私はやがて薄暗い荒地のなかを抜けてゐた。その涯までゆきつくと、私はもはや一つの影、一つの點に過ぎなかつた。不意に私は消えてしまつた。みると、私の前に、長々と「さまよへる猶太人」が倒れてゐた。この世のしづかな眠りを眠りながら。

し
ら
せ

業

私は原稿用紙の上にパベルの塔をうつす。私は文字をうつす。文
字のなかに父親がある。すつかり私を諦めた父親が。

二元論

夕方戸を閉る、戸の内にも夕暮れがある。明け方戸を開ける。戸の内にも夜明けがある。

體溫表

夕方がまたしても體溫表の坂を變へる。あの血の色の稻妻。あの血の色の稻妻。

合 意

暗黙の合意の外に海がある。暮れ方の窓の外に、ああ 荒い海がある、荒い海がある。

アトリエ住居

鳥共の巢には臺所がない、寢室と食堂だけだ。彼のやうに。

し
ら
せ

屋上庭園で蜩かまきりが啼ないてゐる。何處どこに？ 木の梢しやうに？ 木はない、
梢しやうは分らない、澄み透つた空だけがいつばいだ。屋上庭園で蜩かまきりが啼
いてゐる。

夕
鳥

彼等かれらは夕ゆふを啼ないてゐる。彼等かれらは樹々うゑに住まふ巢ねを持つてゐる。
——彼等かれらのうたが彈丸だんがんのやうに私の詩うたに穴あなをあける。

一 隅

庭は乾いた砥の色をしてゐる。夕方、そこに出ると、青い篠がいちめん^{ちめん}に人の顔にうつる。

仕事

樹々の梢で、誰かが素知らぬ顔をして、重い書籍を讀んでゐる。ときどき頁を切つてゐる。

不在

病室の壁に手紙が貼つてある。砂地に倒れてゐるカンナの花。寢臺のシイツの上に日が這入つてゐる。

孟春

私の皮膚は神経の地圖を透かしてゐる。

後
衛

私は彼のアトリエで、パンと焼肉とミルクと食鹽で、はなはだ愉
しい夕飯をすました。この皿、このナイフ、——この質素な食器の
背後に誰があるのだらう？

初
夏

浴室に魚がある。

炎 天

氣象 其ノ一

圖書館の煉瓦塀がびつしより汗をかいてゐる、私の眞似をして。

56

夕 立

氣象 其ノ二

返すものは返さねばならぬ、たとへ謀叛いぼんと呼ばれるまでも。三週間の快天の後に、ああ、この豪雨。

57

冬
眠

冬、空の裏にある空、それが来て私を灰色に塗る。私は壁の内側に閉じ籠る、「隣の人」、「隣の笛」と。

寒
さ

冬、私の掌の白いすぢの上に、過ぎた歳月が集る。

想

厨房に雪がいつぱい吹き込んでゐる。

落
魄

野
の
人

山の頂いたての高い木の梢で、誰がこの世に生れたか、私は知つてゐる。
山の頂の高い木の梢で、誰がこの世を見てゐたか、私は知つてゐる。

想

枯木の原を分けて、彼は歩いてゐる。あの枝もない木々の上に、
木々の雫が、彼のマントの上にも、木々の雫が、降りかかつてゐる。
——彼には戸籍がある、そして持て餘した行末が。やがて雨に替つ
て雪が、雪に替つて嵐が。

彼は追はれるだらう、白色ロシア人のやうに。けれども彼はそれ

を拒みはしない。枯木の原を、彼はあやふく躓きながら歩いてゐる。
彼の背の上に荒い風が、晴れるともない空が。

そして、ひとり彼ばかりではない。

冬
至

圖書館の壁に筒穴をあけて、ストオヴの据附けを終つて、冬の入
口を附けて。——去年の雪のことを少しばかり手紙の端せに書いて、
愈々おしまひだと諦めて、木枯と時雨をぼんやり考へて。

旅の端書

一

十月の雨は降る。私の時計の文字板は曇る、私の顔のやうに。

二

十月の雨は絶えず咳をしてゐる、私の眼近の樋竹で。

三

十月の雨は歇まぬ。思量の外を流れる河。陰暗の次第に太りゆく河。

前
夜

けふこの邦で、この町で、私は祝祭の鐘を聴く。この邦で、この町で、私をなぐさめるものはなんだらう？ 私はしづかに、眼を閉ぢ手を組み合す。夜はそのなかに私の夜を作る。深い傷手を負ひながら、私に、やがて最後の朝が来る。ああ、それを、誰が知るだらう？

白
日

私は仰向きながら、誰の顔も見えてゐない。眼の上に、白壁の天井が落ちて来るだけだ。私は厭々看護婦に返答する、つとめて用も無ささうに、嘘のない嘘のなかで。それなのに、抛げ出された診断書のなかに、不意に私は怖ろしい獨逸文字を見つけ出す。私は眼を見開き、息を呑み、自分に詰問する、——お前は知つてゐるか、絶望

とは、未練とは、あさましい生命の執著とは何か？
窓の外に、あかあかと日差しが溢れてゐる、事もなく、今日と昨日に變りなく。

私は不意に、荒涼とした蒼^{こほろ}も生えない空き地の前に立ち停つてゐた。私はしかし、しづかに杖を起して、そのなかに歩を移さうとした。すると、私は薙^なぎ倒された。私の眼の上に、涯^やしない、灰色のVideがずり墮^おちて來た。私は立ち上つた。すると、また、完全な暗黒が墮^おちて來た。……

再び私は杖を起して歩き出した。白壁のやうに、清らかな日差しがいつぱい溢れてゐた。見知らぬ小鳥が啼き、低い屋^や並^{なみ}がかしいてゐた。

鬼

私は五つの子供だつた。玄關の格子に私は上つてゐた、そして戸外を覗いてゐた。雨模様の、ぼんやりと暗い戸外を。

——表には、母が鬼がゐると云つた。

私はようやく二十はたちを越した若ものだつた。坐り慣れた机に向つて、

私は原稿用紙の反古はごを重ねてゐた。そして誰かが私に囁いてゐた、又ものを頸けすぢに加へることしかないと。

——身のまはりには夥しい破れた扇の骨がじつさい散つてゐた。

そのなかには昔の鬼の白い齒もまじつてゐた。

私は玄關で泥靴を脱いでゐた。すると私は思ひ出してゐた、母のなかにも鬼がゐたと。やさしい手をした鬼が……

晩
秋

私のルウイズ、お前は、片側日の當つた往還を、前跼みにいそいそと立ち去つてゆく。僅かな常磐木を除いては、どの並木も、かすかに紅葉を残して、殆んど骨だけになつてゐるが、——折り折り降つて来る枯れ枝の切れはしに、行人はふと何かに打たれたやうに立ち停つてみる。その往還の向うに消えてゆく軽い日傘のやうな人の

姿。

博物館の中に在るやうなあの濕りをそのまま、空の明色が融かしてゐる。

私は草臥れ切つた五體を促して、窓を閉めながら、皮膚を日に透かしてみると、私の肉體のなかに、私のルウイズ、お前の手の觸れた茶碗が毀れてゐる。

荒 唐

一日雨が降つたり歇んだりした。曇天が雨のあひまあひまに庇の外にあつた。

夕方私はK橋から泥濘に足を抜き抜きあのイブシオヌ學院へ行つた。鐵の門を潜ると、すぐ左手に沓洗ひの水があつた。石段を三つ

越すと、三和土の廊下だつた。——少し早く來過ぎたせるか、あんまり人のかげを認めなかつた。二階への階段を一つ折れて、高等科の教室の扉を排して軍人のやうにづかづかと這入つた。すると、私は十年前の私自身の母親を見たのである。

ママ！ ママ！

私は直立したまま、稻妻のやうに、十年間の荒涼を計算した。小柄な胴を包んだ熊の皮が、かほそい頂の上に綺麗な束髪が、薄い胸へ落してゐるかすかな眞珠の光が、——彼女の *name* といふ名前が、異様に、私の網膜のなかから落下した。

室内にはやがて灯が這入つた。板机に手を置くと、冷たさがさつと五體に沁み徹つた。私は意味もなく、あの河岸の、無言の倉庫の列を想ひ起した。あの浚渫船の傍そばで歌を歌つてゐる、縮れた髪の女の子を想ひ起した。

さよなら！ さよなら！

私は教壇の黒板を眺めながら、既に思量の外に私の母親を棄てた。——そして今日、私が一人の女性を、大理石大理石のやうな女性を、愛し始めてゐるのは云ふまでもない、恰度復讐のやうに。

倦
怠

年老いた侍従は廢帝の腕を抑へた。若い廢帝の手から劔は脆く地上へ落ちた。久しい倦怠の午後であつた。すさまじい稻妻は、しかしそのとき、彼等の面前にある高い木立の枝條を裂いて消えた。ついで沛然と豪雨が來た。

そんな嘶を讀みながら、太郎は眞劔に考へ込んでゐた。

小さな青空

一

蒼白い墓石が入り交つて竝んでゐるなかに、一つ、眞つ白い御影石の小さな墓石が立つてゐました、そのかしらを秋の冷めたい日差しに濡らしながら……

二

その子供は不幸な子供でした。

高い檜の樹へ登つて木の又またに腰を下ろし、うすみどりの葉つばの間に透いてゐる、美しい青空を沁々眺めてゐたのでした。するとその途端に腰をはづして、一旦は太い枝の先に引掛つたやうでしたが、再びどたと下の土に落ちました。

その子供が片目でちんばで、その上薄莫迦になつたのは、その日、——美しい秋晴れの日からでした。

うすぼんやりとした日々が烟のやうに消えてゆき、その子供の記憶には檜の樹も自分の落ちた事も遠のいてありませんでしたが、あの美しい青空はどうしても忘れることが出来なかつたやうです。——その子供は内にばかり居て、時折り怨めしさうに青空をみつめたり、あとは殆んど暗い顔をして寝てばかりゐました。さうして、寒さうな鉢の金魚を刺し殺してから、その子は床に就きはじめ、やがてだんだん痩せてしまつたのです。

その子供が死ぬ前に、醫者——それも博士が來たさうです。博士は白い敷布の上に狎のやうに寝てゐる子供の、骨だらけの胸に手を觸れて、「——もう遅い。」と、きつぱり云ひ切りました。別してやさしい母親は悲しさに身慄ひして、臉にいつぱい水のやうに光るものを溜めてゐました。父親も、しかし蒼い顔をして瞳を病兒から反けてゐました。

けれども病兒よりも冷めたい博士の手や、額や、妙に澄んだ眸に誰も氣づく人はありませんでした。

五

葬儀屋は新しい寢棺ねぐらを一つ頼まれたので、檜ひのきの美しいのを作りました。

秋の午後はとりわけ睡ねくなるものです。

「——人は死ぬものだぞ。」と、よく口癖に云ふ、葬儀屋の息子が、その美しい寢棺のなかに忍び込んで、ゆつくり晝寝をしました。

その寢棺には新しい檜の匂ひと、幾分、あたたかい人間の匂ひがしました。そのなかに冷めたい死兒のからだが入れられたのです。

六

墓掘り男は「——またか。」と、こぼしながら湿つばい墓地の緒土を掘つてみました。けれども、ふしぎにその男の顔は平気で、秋のうすら寒い日光を透かしてみても悲しげにはみえませんでした。

石屋は陽気に、さつそく墓碑を刻きみましたから、その子供の墓はまもなく立つたのです。

七

その母は悲しげに、時折り姿を見せて、密しきみの枝などを墓石に添へてゆきましたが、それが枯れると、墓掃除の婆さんは澁々これを取りのけたものです。

八

蒼白い墓石が入り交つて竝んでゐるなかに、一つ、眞つ白い御影石の小さな墓石が立つてゐました、そのかしらを晩秋の冷めたい日差しに濡らしながら。

言葉に就いて

言葉はものの性格の一つの症状として常に表れてゐる。

言葉の表面にあるものは皆それをうしろから押してゐる量の一端である。

言葉に於ける量は絶えず質へ移りかはる、しづかに或ひはさわがしく。

言葉。それは地表だ。――起伏し、滑走し、沈潜し、崩壊する。

言葉。問題は常に論理にあるのではなく、論理以上か論理以下にかかつてゐる。

言葉。彼の迫力はしかし屢々乾燥的である。けれどもそのかはり屢々基礎的である。

言葉のなかに彼の聰明が、彼の技法が、彼の美學が、彼の世界観が住んでゐる。

一つの視点と、一つの背景と、一つの火急性と、一つの執著性と、

――言葉。賽はそれ以前に既に投ぜられてゐるのである。

言葉の運動はアブサンスに向ふ最もすさまじい運動である。

私の體操 (Cahier d'exercices)

空は青い。私の反省に現れる姿において、それは冷え冷えと澄み透つてゐる。常に繰り返される「何か？」はいまここに停止して、ただ寂寞だけが大きい。

秩序が動く。私は考へる、私の皮膚もこの空に似てたいそう澄んでゐると。この空に似て？ 寧ろ私は云はねばならない、私の存在もこの世界に似て始めも終りもないと。

常々私のからだのなかに在る沙漠。そこに住んでゐる乏しい
小鳥共。彼等は羽搏きながら啼くが、啼きながら血を流すが、
私はいま、彼等に無關心だ。
けれども私は寂しくないとはいはない、私において絶えると
もないこの省察。それは何處へ續くか。

併しながら、なほ併しながらギリシヤは何故亡びたか？ 私

も亦自問する。

やがてその時が来るであらう。ヴァレリイはそれを豫見した。
ひとびとはそれをロシアに見た。

「或る混乱が未だ支配してゐるが、しかしもう少し時が経てば、
すべては明らかになるだらう。われわれはその時終に、一動物
的社會の奇蹟が、完全な決定的な一蟻群が出現するのを見るだ
らう。」(精神の危機)

すべての営みは自らを消滅することに終る。やがて秋も終るであらう。私は夥しい記號のなかに、夥しい塔を建ててゐる。塔はしかしその完成と共に崩壊し、大變容易に私を傷つける。けれどもなほ私は何を残し、何を残さうとしてゐるのか？

102

常に私のなかに繰り返される冬。——すべての現象の極北は暗く、冷やかに、しづかに私には見える。

すべての業は、満ち溢れる所得と全き缺乏との中間に現れ、またその中間に消え失せてしまふものであらうか？ 絶えつゝもない自己への離反。これのみが私における倫理であり、眞の自由ではなからうか？ けれどもなほ常に「在りうるもの」への好奇。

私のペアトリーチエは何處にゐるか？

103

私も亦屢々自答する、そんなにもそんなにも明瞭を欲しなかつたならばいつそう明瞭であつたらうに！ と。

ひとは何よりも「問」を起さなければならぬのではないか？
問ひながら、ひとは平生言葉で「答」を得ることを経験してゐる
のではないか？ それならば何を措いてもよりよく問はなければ
ならないのではないか？

けれども何故問はなければならぬか？ しかも何を問はな
ければならぬのか？

——ヴァレリイは私に語るやうである、そこに「絶望せる明晰」
があると。

「よく隠るるもののみよく生く。」これはデカルトのその生涯
をとほしてのマクシムであつた。

「考へるに足ることは既に考へつくされてゐる、ただ私のなす
べきことはそれを再考することである。」私も亦それを知つてゐ
る。——けれども、私の刃のこぼれた一ふりの劍にはこのやうに
血が流れてゐる。

詩集 荒地

併しながら何が何故マルセル・ブルウストをして云はしめた
のであらうか、一私は何も苦しまうと思つて苦しんだのではない、
私はただ私の苦しみの獨自性を尊ばなければならなかつただけ
だ。」と。

荒
地

荒地

晴れた空のなかに啼くものははや啼かない。水のほとりの薄氷にひととき滲む日差しを透かして、ひとは、何遍同じ地黠を振り返りもしたことであらう。一度往けば一度は還る。半ば枯れた雑草の穂波に歩みゆくものの遅速を案じて、どんなにこの身を勞つたことであらう……

早 春

日は低く、——雑草の、日に透く青い莖立ちも低く、——そのあたり、あはい蔭と日向の入りまじる、水ともみえない水の上に、私は身を投げる。私は次第に沈んでゆく。私はそこによこたはる。この水底から、さむざむと、空がみえる。右ひだり、耳のほとりに音立てて、風が吹き過ぎる、澄み透つた青さを擾して。私は眼を閉ぢ

る。私のなかに、傾いた木の影が倒れて来る、枯れた木の葉が降つて来る、ちぎれ雲が、行人の影が、さまざま芝居の背景が、とりどりの大情小感を書き雑ぐつた文反古が……しづけさのなかの、この涯しないさわがしさ。私は自分の手を握る、この血に、この肉に、絶えず閉ざされてゐるものの手を。この日頃、この血の、この肉の、——この空の、この淵の、——親しさ、切なさ、疎ましさ。あたたかく、寒く、柔らかかに、——見知らぬ人の来て、危い水底へ、私を撒ぶ、私を撒ぶ、風の手で、水の手で。ああ、この遙かな道行。……わななきながら、私は身を起す。覺め果てたこの眼に、ただ雑草の青い莖立ちが、いちめんに寫る。

雅歌

ひとしきり空に雲はながれる。そのほしいままな流れ藻の底から、
日はまた深く、強く、明るく耀き出す。うすみどりのしげりかさな
る雑木（まき）のあひまあひまに、——ここにも、ひかりは澄みながら、生
きるものの影と息と聲とを招く。このとき、花のある木（き）がくれに、
はやあはれに帯をまきなほす、その素直なひとの黒髪の上に、晴れ

ばれと、いつせいに問ひかける春鳥（はるどり）の聲のかなしさ、せつなさ……
木は烈しく芽吹きながら、おのおの、頑な古い枯れ葉を根元に降ら
す。草は草ながら、まばらに耀く青と沈んだ青とに色を分ける。こ
こに来て、ふたりして臥しながら踏み敷いた草の、起きかへらずに
残るさまをみよ。ひととき死ぬはたやすい、翔ぶ鳥もみしらぬ彈丸（たまご）
にふいにおちる。頬擦り寄せ、息の根せはしく歎いたひとよ。はや
足どりおもく、おのれの影を移す草の上に、昨年（こぞ）の落葉はうそさむ
く音を立て、日のひかりのみはづかしげに、なんと眼に沁むことよ、
眼に沁むことよ。木（き）のま木（まき）のまに、あかあかとかがやく日表を、つ
と過ぎて、わななくばかり鳥が啼く。おのおのその身のふるさとを
失ひ、言葉なく、ひたすらに荒い身振りに啼きしきる小鳥共。……

ひとつの息に、ふとかなしさをものいふひとよ、その手を手に、その肩を肩に、ふたりして、眞つ白い花のある木こがくれの影の水底みぞをあかずあゆみゆけ。やがて夕ゆふが来て、さむざむと、おもひきはまる日影をなげかけるまで。

川のほとり

なんにもぬさうもないぞ、——いかにも、眠りからさめたばかりの川のいろだつた。それでも、あたりに春蟬が啼いてゐた。なによりも空の蒼が、それにもましてその生きものの聲が、じいんと、水のひとつひとつとつささやかな皺に沁み込んだ。耳が眼になる、——その聲にさからつて、砂地を選んで歩いた。踵かかとをあげる毎に砂がうし

ろに少しずれて、足跡がすぐついた。ところどころに、たんぼぼの莖と花とが風にみだれて動いてゐた。近寄ると、これを踏みつけた。折れた莖を蹴散らした。靴先が犬の鼻に似て、みどりに濡れてゐた。いつか川水の音が耳から遠のいていった。

松の葉

松の木のあひだに、松の葉がほそそと降つてゐた。まだ早い春の日は半空なつかぞらに低く、小さく、寒かつた。——風の聲もないのに、松の枯れ葉が往くひとの肩の上に、踏んでゆく靴の先に、さらさらと降りかかつてゐた。またその先に、新しい松脂まつしじの匂ひがいつぱいに漂つてゐた。それがあちらこちらの幹を濡らし、枝葉を濡らし、滾

れ松葉の道を濡らしてゐた。——遠い海鳴りのするその道で、頬に振りかかる簡素な松の葉の、しづかな雨がしきりに私を動かした。

海

風が来て、いつせいに波が立ち上る、波が倒れる。……この凡庸な眼のなかへ、一瞬寒い群青の壁が危く聳え立つ。その壁がいきなり倒れて来る。……この粗野な耳のなかへ、日頃ひとり私の身の上ばかりを案じる母親の、床の上をあちらこちら踏み惑ふ足音の、絶え間ない往來。……遙かに沖を恍けた汽船が通る、寒さうに口笛を

吹きながら、眞つ白な息を吐きながら。岸壁の縁を、海を連れて、途方もなく愉しくて、私は歩きまはる、煙草を無闇に吹かしながら、出船を待つ船長のやうに。火の海、風の海、この踵の向き向きに海の色も、思ひ出の色も改まる。またしても寄せ返す群青の壁の縞……ぐいと傾くその斜面を、羽交ひの下に締めながら、投げ出すやうに、眞つ白な群鷗が躍り立つ。その尻つ尾の先に、あわてながら碎け散る水泡の騷擾。……お母さん、寄り添ひながら、不意と思ひがけない遠くまで、海は私を突き放す。あの赤い、小さな足許に、絶え間なく口を開ける深淵を、ともなく越える鷗共。……しかしそれにしても、海はありありと私を隔て、地上へ私を送り返す。お母さん、眼を閉ぢて、私は倚りかかる、岸壁に打ち上げられた赤く錆び

た大きなブイに。私は眠らせる、このブイそつくりな私の夢を。お
母さん、お母さん……

風かぜ

私の身振りに添ふやうに、——次第に空は高く、青ひといろに澄み渡る。その底無しのしづけさが、不意に、私をはぐらかす。……やがて、落ちて来る風かぜのやうに、緩やかな下降のなかで、私はあやふく踏み停とどまる。私の部屋の番號は廿六、今年で私も廿六歳、——この凡庸な數字のなかに私はひとり閉ざされる、見えない糸を手繰たぐ

りながら。

風こがらし

町にこがらしが吹く、こがらしに町が動く、さわがしい衢ちまたを抜けて、いきなり風の手がポオチへ来てさきはる。私の部屋の窓硝子にさはる。私は立つてゐる。私は動けない。世の中はさかさまだ。それでも、ここは私ひとりの谷間、一樹の蔭、はや、私は、私は、風に破れた風車、——しかし友よ、私は君に呼びかける。「おお！ 風

よ、冬來たりなば、春遠からじ！」

霜

夜毎暗くまのなかに私は眼をさます。この居間の隣の、實驗室にある澤山のフラスコが、そのなかの水が凍るせゐか、次から次と毀こぼれるらしい。私の手は、もはや把むものを知らない。私はさかんにひどい咳をする。この咳のなかで、またフラスコがしきりに割れる。硝子の破片を齧みながら、折れ釘のやうになりながら、私は、ひたす

ら夜明けを待つ。夜が明けると、窓の外の屋根と、塀と、竹藪の上
に、いちめん凄^{ひげ}い霜が降りてゐる。

盛
夏

青々と晴れた空の、その明色の重さと厚さに耐へて、乾き果てた
頑な立ち根の上に、——はや、向日葵はゆらりと高く、日の向き向
きに、莖と葉のすみずみまでも金の油と汗とをしたたらす。いつか
しら蟬が啼きしきり、その火と油に風を添へる。私に在つて、むな
しく過ぎ去るにまかせた年月も、いま、たくさんの蔭とひかりを連

れて、荒々しく音立てながら立ち返る、立ち返る。

秋
風

雲はしきりに流れ、私の愛犬サンチヨは耳を立て、耳をかしげ、日に幾度か、風の音を聞き直す。夜、彼はよく眠る。そのせぬか晝、彼の足はかるい、私のステッキのやうに。空は青い。涯しなく青い。はや、古い悲しみは遽しく、我等のあたまの上を、通り過ぎる。あちらこちら松の木に蝸が啼いてゐる。——仰向いて、そんなにとほ

けるな。情あつて智なき友よ、私のサンチヨよ、道草を食ふな。おれのとから従いて来い。濱には、紐で吊るした、お前の大好物の干物の皺がもう、そろそろ乾いてゐるだらう。

新涼

一

一晚中ジンジンやめてゐた脚部の、疔の痛みに、雨の音もだんだん遠のいて、朝になつた。不意と息が切れるやうに眠りに落ちて、暫くの間、眼先がずんずん暗くなつた。さめると、枕元に葉書が一枚、従姉から來てゐる。「はなたれて寄りどころなきむなしさに寒きひろのを啼きわたる鳥」、誰やらの歌が書いてある。私にそんな

笛が吹けたら……

二

薄着をして晝寝をした。夢のなかで、川原の砂に寝ころんで、したたか雨に打たれた尾花に、手や足を濡らしてゐた。その間に風邪をひいた。母の勧めで、早いセルを着て、呆として、表へ出ると、——がらんとした、日の無い往來を、翼をいためた燕の、一羽離れて地摺れに辿るのを見送つて、ただただ寒かつた。町角で足袋を買ひ、その場でそれを履いた。歸ると、従姉に返事を書いた……

「暗」の話

闘鶏の眼つぶれて飼はれけり—— 讀人不知

生前、私の父はその凡庸な生涯を賭けて、大きな、おそらく自分よりも大きな、暗へ向つて大方は黙つたまま歩いてゐたのだ。歩きながら、みたものはしかし、いつも小さな影ばかりだつた。それでも笑ひながら私には話した、「——道といふものはよく出来てゐるよ、修三。」と。父はなかば期待してゐたのだ、散りぢりの小さな

影を積み重ねた向うに、大きな暗が強く、劇しく、荒波にもまして打ち寄せて來はしないかと。だが、そのまま、荒涼とした旅が終つた。何も彼も元の奎阿彌だ。さうして父は死んだ。——それにしても、自分がやはり大きな暗だつたと父は知つてゐたであらうか？ 私にはわからない、ただ父自身の暗がその目指してゐた暗よりもずつと大きいやうに見えるだけだ。かはいさうに！ お父さん！——いま暗黒が私の肉を噛む、絶えず私の一擧手一投足に付き纏ふ。……ともすれば日向の方へ伸び出ようとする、あの赤い芽を吹いた枝はしかし、私には分不相應であるらしい。土を破つてひたすら深く、ひろく、ひろがる立ち根、そしてならばそこから青空へ向ふ立ち根、——それが私なのだ。私の足はのろい、蟹に似て。私の手は

しづけさにわななくばかりだ、蝶の鬘かみに似て。私の眼は内側に開か
れてゐる、しかもすべてのひかりを吞んで暗黒だ！ しかし誰に、
誰に私の話がわかるであらうか？

隣 人

既にこころのみ老いたるものはかなしきかな。なべてのことこの眼にみえ、なほなべてのことこの眼にみえざればなり。いふなかれ、世の家々の屋根の下に、そのかみのゆめみしひとなしと。聴くなかれ、その背にあらく閉ざされし戸のおとを。傷つきながら、餓えながら、耀くことなきをとこの子、世にあまたあるよ。そのかたむけ

る肩の上に、ひとつひとつ、鴉なぞきてとまれ。——そのつよき啼きごゑはひとすぢ晴れし空のなかに消え、みしらぬひとのむねのそこにおつ。立ち返り、振り返り、日の在りかのみあかるくて、往くさきさきの雑草の穂波の、ゆきずりのかぜにいよいよあらだつ。みちはいづこにありや。この身地の上にあるかぎりみちのたゆることなし。右ひだりその肩に擔へるものを振りおとせ。あたへしその手を取り戻せ。そこに停とどまることなかれ。みづからの影を踏みつつ歩みて飽くことなかれ。

鬼

灯

尋ねられ、尋ねて、共にいまは、こころ、深き愁ひをわたつ。――
――あはれ、われ等のこひも古りにしかな。青ひといろの空のなかに
ひとり劇しく日の病むごとく、避けがたく、癒しがたく、ふかみど
りこころごころに狂ほしきかな。暗く木立ちをめぐりて、油蟬しき
りに啼き悲しめども、かたみに、己が悲しみのみなもとを知らず、

柱の片影に、ひと立ちて、われよこたはる。――あはれ、きみ、そ
の頬にふくめる鬼灯を鳴らしたまはずや。

初

花

少ししか匂はぬ高き梢の花を、すなはちこの文を、かなしきひと
に参らす。

想

空青く澄みにけるかな川原の水白きより青く澄みきる

「ひかり」の話

病むもののおえかな轉歩に、——ひつきりなしに、透明なあをい日のひかりが打ち寄せ、絶えず泡立ちながら投網のやうにからみつくのだが、なほ覺めないといふのか、なぜなにを踏ふのか、——あはれ、亡き父上よ、子はなほみづからに生あることを疑ふ、音に出て澄みながら、吹く風に、夏草はおもひおもひにうねり、かしぎ、

ながれる。ひときは又またのやうにきらめく草の間に、不圖小鳥の聲は起り、ちりぢりにその聲は啼き歇む。……私はわづかに重い手を擧げる、——なにか窺かに呼び出すやうに、ささやかな身振りは次第にかかる私を解き放す。既に轉歩は思ふさまひかりの言葉となつて風にながれる。いま日のひかりは身に沁みわたり、ひかりはひかりに頬笑みかけ、ひかりはひかりに戯れ、ひかりは崩れ、……はや日のひかりの溢れる海のなかに、あをい雑草のきほひたつ荒波のなかに、私は漂ふ。私はひたすら讀む、うねるみどりの波を、碎かれてながれる空の青を、その波の穂先を迅やかに渡つてゆく人かけを。この明色のありあまる暗黒のなかに、底のないひかりの底に、亡き父上よ、眞珠のやうに、あなたは休み、あなたは眠る。……亡き父

上よ！ 私はあなたの青春なのだが、否、私はあなたの青春を回復
しなければならぬのだが！ 億兆のひかりの波の聲が、千萬のひ
かりの鳥の聲が、私の烈しい希求の聲が、いま暫く鳴りを鎮めて耳
傾ける、父上よ！ まことのひかりのなかの、思ひ寝のあなたの寝
息に！

落穂

新藁の上を踏みながら、人の子は、少し憂へて、過ぎゆく雨にあたる。この人を、この人の名を問ふな。たぶん言葉に携はる一介の書生であらう。積年、川原の水のなかにその青さと共に言葉を流した書生であらう。高い樹の幹に似て、次第に肩先から濡れながら、少し身の上を案じて、天から降るものの一色の音を聴く。——爾、果して若者であるならば、この日、年をとれ。五十歳になれ。その

とき寒さにもまして、賢さが来るであらう。長い道のほとりの澤山の花々もいつか皆枯れて、あはれを残すのは、切株にまぎれて、滾れてゐる落穂のみではないか。やがてまた木枯しが吹くであらう。それは何ものにも匂ひを添へぬ。それは流れのほとりの岩を吹き尖らせ、藪のなかのすどい竹の葉にかくれる、——そのやうに、爾の心を荒く一色に塗り潰せ。

待て、麥の花の咲くときが来るであらう。
耐へよ、麥の花の咲くときが来るであらう。
そのとき、私は、太陽の金と銀にもまして、耀かしさを持つてあらう。

海のほとり

丈高い赤松の林のなかに、泥と砂との入りまじつた徑がひとすぢ
附いてゐる。遙かに高い梢を揺すぶつて、風が一類とどろき渡る、
波そつくりの音を立てて。その聲が垂直に下の方へ、私の足許へ落
ちて来る。——まるで水底から遙か上の水面の動搖を聴くやうに、
かすかな氣流の波紋のなかを、何か懸命に防ぎながら、私は潜り抜

けてゆく。空は晴ればれと一面澄み透つたコバルトのなかに、雲を
ひとちぎり搾り出してゐる。私の無意識の遊歩がだしぬけに停ると、
眼は遽かにはつきりと覺めたらしい。足許からずつと遠方まで銀灰
ひといろに、照り返してきらきらと眩いばかりの砂地が、平に、と
ころどころ眞つ白な波を打たせてひろがつてゐる。よくみると、砂
の表面には、たくさん水溜りが裂けてゐて、その罅隙毎に、海藻が、
荒い波に浚はれて置き去りにされたのだらう、女の黒髪のやうにか
たく吸ひ附いてゐる。だが、いま、海は砂地のずつと向うに、太陽
の夥しい征矢に射抜かれた豹の皮をゆるやかに波立てて濡れてゐる
だけだ。嘗て何ものが終つたであらう？——この原色のありあま
る擴圈を前にして、私はさう自問した。

谷

間

雨

百人の教授があるにしても、この邦の土の上に、ヴェルレエヌの雨は降らぬ。

一人の教授があるにしても、この邦の土の上に、なほヴェルレエヌの雨は降らぬ。

谷 間

一つの部屋、一つの椅子、——しかし、私は立つてゐる。私に二つの耳がある。右と左と、まことの言葉を聴き分ける。こちらは戸口、そちらは庭。……

こんなに私は丈夫になつてゐるのに、なにをすればいいのだらう。晴ればれとして、日ざしが敷居を越して、不意に机の下まで来る。

この肱のかたはらに、傾いてゐる夜のままでのランプ、よごれたシイツを敷いてゐる寢臺の塵。私はその上に指で書く、「だんだん明るくなる。」それから「仕事」と。私は籠から鳩を出して、それを飛ばす、帳面（帳面）の上に、本の上に。

冬から春へ、春から夏へ、みえない橋を架けるやうに、何遍（何遍）著替（著替）をすることだらう。牕には空だけが、部屋には寝具だけが、その位置を變へない。この狭い谷間のなかで、私は仕事をつづける、蜘蛛のやうに、左右に糸を張りながら、左右に糸を引きながら。

夏の栞

からからと音立てて、日の車はいつさんに天をいく。またしても夏が来て、——穂麥は莖毎に赤らみ、啼く聲は冴えながら、虚空を風に乗つて黒鶉はながれる。その日、その鳥のそのすさまじい弾道を、私は佐和とふたりして、飽かず眺めてゐた。すると、私の眼の前に、空の眞つ蒼な壁がいきなり倒れて來、その屈折面の崩壊のな

かに、太陽が眞つ白に小さく尾を引いて落ちていった。そのとき、ひとすぢ、麥の穂波を分け、道の泥は朱の色をしてゐた。そのはづれの斷層はいちめん濃い硫黄をながしてゐた。……すこやかに、強く、明るく、夥しい弾力を、佐和は、私とお揃ひのタオルの着物に包んでゐた。そのとき、佐和は私をかかへ、大きな聲で笑つてゐた。なかなか笑ひ歇めようとはしなかつた。——その佐和が死に、父が死に、私は久しく深い、暗い、底のない井戸のまはりを歩く夢ばかり見てゐた。その穴のなかに何遍も太陽が落ちて消えた。來る夏も來る夏も、私は寒かつた。

秋

一

私のなかに住んでゐる大變音無しいひとりの主人、大變佗びしさうな私の主人、——彼は、もはや、私に命令することもないらしい。平生竊かに私をいたはる、彼は穩やかな教師なのだが、もはや格別私に教へることもないらしい。

木漏れ日はちらちらと、さわやかな風に揺れながら、天から雲の

梯子を下ろすのだが、キュールの寢椅子に寝ころんで、たまに、倒れたその影が不圖起き直つたりするのだが、——はや手に本も重いらしい。空氣は澄んだ水の色をしてゐる。日差しは沈んだ火の色をしてゐる。

彼は胸に手をあてる、——ああ、海、二枚重ねた部屋着の下に、荒い聲を呑み込んで、風ぎ渡つた晝の海。夥しい、毀れた珊瑚を埋めた海。……

夜が来て、あわただしく、彼は追ひ立てられる。彼には足場がない。足場のない梯子の下で、暗は次第に深くなる。彼は、身もだえ、手を挙げる、足を投げる。さうして内部の私を眠らせない。

——たのむ、ポオチの蔓薔薇を刈り取つてくれ。枯れて乾いたその蔓がこの首にからまつて仕方がないのだ。庭の半ばを占めてゐる

あのカンナの花を刈り盡くしてくれ。一莖毎に風に亂れて、黄に荒れながら、それが夜も私を眠らせないのだ。そこで矢鱈に日蔭を作る立ち木をみんな切り倒してくれ。その葉末葉末が柔らかな日差しに無闇に捫つて仕方がないのだ。それが私の目蓋に捫つて仕方がないのだ。私は胸いっぱい吸ひたいのだ。秋風を、薔薇色の秋風を……

暗愁のエピタラム

ボオチの蔓薔薇に、柔らかな日差しは照り、粗末な柱の影、柱に、したたる蔓の影、——面映いその片影は戸口から壁へ、穩やかに移る。風は寄せて来る、水底のまるい小石を渡すやうに、その赤白のつぶつぶな花の苔をゆすぶりながら……

私は若かった。夢の過剰に、私は途方に暮れてゐた。空ばかりが

青かった。あの風の窓に倚りながら、ぼんやりしたり、おどおどしたり、みしらぬ純潔に無器用に躓いたり、さうして大方放心してゐた。その窓に手を置いて、私のマリア、いつも並んでゐたのは誰だったか？

私は毀れた茶碗だった。私は曲つたスプーンだった。私はかしいだスタンドだった。私は破れた本だった。私は、私は、雲の晴れ間、交差した樹間に、あわてて落ちて来る小鳥だった。……

機嫌がいいと、お前は歌をうたつてゐた。やさしさと清さと美しさと、裏の裏まで覗き込む、あの、あわただしい心づくしと。その秘めやかな幸福は、私の眼の上を素通りした。お前の幸福に、私は足を踏み込まなかつた。私の雌鷄、私のマリア、やがてお前は鷲に

なつた。

無法な日々！ 私にはかかへ切れない仕事があつた。夥しい夢があつた。その眞ん中に、不圖、お前は立ち停まる。そのとき私の姿がお前にはみえない。周囲の打算と、たくらみと、いつはりと、途方もない距離ばかりがみえて、私の姿がお前にはみえない！

私のマリア、私はいつまでも信じる、私はお前を愛し、お前は私を愛したと。悲しみはかはらない。希望だけがかはる。しかしマリア、その希望もかはらなくなれば、私は地下にゐる。……

昔の日

屋根の片側を被ふくらゐ大きな桐の木があつた。その影が、庭先へ落ちて来て、薄絹のやうにあなたを包んだ。あたりで蟬がいつせいに啼いてゐた。そのなかに立ちつくしたあなたは、麥色の肌をした十七歳の乙女だつた。

あなたは氣持ちの平な乙女だつた。無造作に髪のを二つに分け

て編んだ束を兩肩の上に垂らしてゐた。あなたの優しさが周囲の壁を洗つてゐた。日差しも木蔭も風の色も、みんな綺麗に濡れてゐた。方々の庭に、薔薇と苺の匂ひがした。垣根を越して、蜻蛉がしきりに舞ひ込んだ。あなたはあぢさゐの繪をかきながら、明るい日の方へ向いてゐた。私は本を読みながら、ときどき、あなたを眺めてゐた。私はかるい船酔ひを感じてゐた。

やがて、休暇がすむと、何もかも消えてゐた。まだ残つてゐる船酔ひに、私はあはれな嘔き氣を感じてゐた。

過ぎた時間

澤山の乙女等が姿を消したあとで、振り返ると、私には四季もなく、特に夜と晝との區別も要らない。いそいそと人妻になり、俄かに乳臭い母親になり、彼女等は大理石のやうに固い乙女だつたことを、すつかり他人事のやうに忘れてゐる。その手が昔の柔らかな椅子の背にさはり、正確に、古いドアのノツブを握る。昔ここに置き

忘れていつた懐しい花の壺を、優しい日の光の觸れて来る窓邊に置いたその壺を、もう振り返ることもない。どつくに飽いた鳩時計のやうに、彼女等の前で、私ももう何一つ感じない。誰かが私に替つて、昔の夢を見てゐるやうな氣がする。あはれな年寄りが、「——若い娘達にかこまれる時は、それはもう孫達だ！」とつぶやくのに、成る程と、ようやく私も耳を傾ける。さうしてまだ諦めかねて、私は過ぎた日の茫漠とした時間を贖めてしまふ。

春
泥

冬もやがてあけるだらう。廂の下で、しきりに戸を叩いてゐる。日向の敷石の上で、倒れた影が手を振つてゐる。——それは戸口に當る日差しを作る人影だ。戸がしぜんに内側にひらく。臆病に、少しあわてて、私はよろめきながら這入る、テーブルの脚にぶつかつたり、椅子をひっくり返したり、床敷に蹴躓いたりして。——それ

なのに、新婦のやうに、お前は遅い寢床のなかで固く眼を閉ぢてゐる。高い聲で、あんなにいさましく、雉が朝を啼いてゐる。めいめいその妻を連れて、どこやら木の梢で勢込んで啼いてゐる。その聲がいつそやお前と私を別々にする。寢臺の上に、お前は起き直る、古い涙でいつばいな眼をあけて、あらはな白い肩の上にいちめん黒髪を振りみだして。私は頑に眼を反らす。私はふいと庭に出る。すつかり霜に枯れた芝生を踏んづける。霜にいたみ日に溶けた泥濘を、抜き足差し足、踏み越える、荒い日差しを額に眞正面に受けながら……

木枯しも止んだ。立ち枯れの裸木があかい蕾を持つてゐる。無様な仆れ木から青い芽が吹いてゐる。眼近の土へ降りて、飛び交ひな

がら、鴉が二羽啼いてゐる。ゆきずりに土へ降りて喉の赤い鳥も啼いてゐる。熊笹の黄いろい波の向うに、うすむらさきの山並もみえる。こんなに透明に、日差しが音を立てる、風は東の向きだらう。

晴れた空のなかに日が大きな網を張り、やがて夥しい小鳥を集める。またしても鳥と魚と人と、空と地と水とを結ぶしづけさが耀き出す。噓くしゆみをしないで、さうだ、豪然と歩くのだ。——「萬事は上首尾だ！」

飢
渴

エ
ピ
タ
フ

この木の實、荒き朔風に吹かれて落ちぬ。
あはれ、薄寒き半空に、その聲絶えて消えぬ。

飢
渴

冬になつた。今年はストオヴも、薪も、乾草も、藁も、——分け
て温かな食物も、彼には無かつた。彼は旅に出た。彼は荒い手と脚
とを持つた。灰色の鉛板の上に、黙々と、すさまじく亂れた足跡を
綴つた。それは晝であつた。それは夜であつた。

彼は衢に出た。そこには縦横に路が切られてゐた。彼はそのひと

つびとつを^{はや}筆のやうに抜けた。家々には數字が附いてゐた。そこに
多くの、動かない年齒を讀んだ。彼は次第に膠灰質の皮膚を持つた。
空は無かつた。すなはち、明暗の失はれた^{みだ}水底に、彼は居た。彼
は手に刃物を磨いた。無機の性格を持つた。多くの見えない手と結
んだ。既に彼は群盲を貫く、見えない動力であつた。冬が終つた。

私窩子某轢死事件

風のなかの乙女は不意に一本の傾いた草の莖のやうに折れて倒れた。

風のなかの乙女はそのやうに一臺の車にひかれて死んだ。

風のなかの乙女の死は、——風ばかりがこれを受けとつて手放した、落ちてくる一羽の雀のやうに。

そして誰も泣かなかつた。區吏がぶつぶつ滾こぼした。警官はたやすく忘れた。

そして私は在りの儘を歌つた。

その頃には

干物の目にも荒い空のいろがうつる。悲しい記憶、悪い記憶——
人々は何も彼も忘れて、磨滅した机に肘をついて、表紙の破れた本
に呼吸を併せてゐる。たつた一つの古ぼけた鐵のストオヴ、なかに
僅かな灰燼が積つて、寒い空氣はうつすら濕つぽいものを押しつけ
た。ことさらに歪んだ張り出し窓、手を觸れると、どれもこれも框
の上が、塵埃で一杯だ。みんな咽喉が乾いて、たいそう暗い顔がも

うろうと階段に消えて行つたり現れたりした。

だが、冬の圖書館は焼パンの匂ひがする。私はわびしい空腹を夢
みた。ペンキの腐つたやうな、およそ積年の、貧しい人々の體臭が、
銅の手欄、木の階段、扉、机、剥げた漆喰の壁、その割れ目割れ目
に沁み徹つてゐた。油煙やガスの悪臭を溶かした灰汁は窓硝子を黒
い板にした。その上、外景はセメントと重油の市街と溝渠が木枯し
のなかで動いてゐる。建物までが風でぎしぎしと脆い音を立てる。

冬の圖書館はこの陰暗のままに閉ぢられるかもしれない。いや、
雪が降つて、また木々の枝に赤い芽がふく頃には、崩れてゐるかも
しれない。そのそばには、ふしぎな軍隊が立つてゐるかもしれない。
私はさう思ふ。

老人

空は川原の水に似て、その底に、何か物を沈めて動いてゐる。それが太陽だといふことが、しばらくしてから不意に判る。やはり冬のらしい。雲切れがして、つと弱い日影が射す。その日脚が寢臺の下まで延びて来る。——老人はゆらゆらと肥満した體軀を持ち上げた。洗面所へ行つて、眼と鼻をこすつた。口を漱いだ。しかし、そんな

ことはもうどうでもよい。ひとりて用意の、パンとミルクとチイーズの、手輕な食事をすました。冬だらうと夏だらうと年柄年中彼は寒い。それでも今朝は、温かい寢巻がまだ肌に沁みてゐて、ありがたい。石油のストーヴに火を點けると、弛んだ恰好のまんま、廊下に出てみた。前には、朝になると、庭樹を何かと見直したものだつたのに、——霜に荒れた芝生には、高い樗の樹が一本、日に霑れた枝先を、晴れた空のなかに張つてゐた。かしらを振つてみた。何か一つ、思ひ出さなくちやなんない。部屋へ戻つた。新聞を手にした。手にしただけで捨てた。長椅子にどつかり腰を下ろした。机だの椅子だの本棚だの箆筒だのの間に、影とも云へない影が切れて動いた半分床を埋めたカアペットのの上に、かすかに積つてゐる塵も殆んど

薄紫に澄んでゐた。

書棚から昔の本を抜き出したり、書き込みを読み直したり、草臥れて、ぼんやり立ったり坐つたりしてゐると、いつか時間が彼を取り残すのであつた。晝になる。部屋がいつそう明るくなる。長椅子に横になつて、午後はうとうと睡るのであつた。日差しが退いて、夕暮れは部屋の内部から始まる。書棚のあたりから、先に暗くなる。すると外部のかすかな騒音をいつそうよく迎ひ入れるやうになる。かうした暮色のなかで眼をさますと、彼は愈々自分が世間から遠いところにあるやうな氣がするのであつた。薄ら寒い廊下を歩いてみると、足音が他人の足音のやうに、ぼやけた耳に返つて來るのであつた。

いつもの日暮れよりも、けふは外がざわめいてゐた。往來に向つた窓口を少し開けた。首を寄せた。すると、眼の下を、肩先を撃たれた兵卒が一人、血塗れになつて馳つて行つた。彼は一瞬の忘我から、或る準備への心持ちに急いだ。窓硝子にあてた三本の太い指がかすかにわなないた。——しかし猛然と譯の判らない笑が老人の口許に溢れて來た。彼は永年忘れてゐた世にもすさまじい笑を笑つた。夜が落ちてゐた。部屋には灯が點かなかつた。散彈の音がひつきりなしに起つた。

父と子

太郎、お手紙をありがたう。だんだん字が上手になつて素敵だ。お前は随分丈夫らしい。お父さんはときどき病氣をする。けれども病氣に負けない積りだ。お父さんは仕事をしてゐる。お父さんは書きものをしてゐる。

太郎、わたしを叱るな。

表では木枯しが吹いてゐる。木枯しのなかにお前がゐるのではないのか、——わたしは原稿紙をみる。書いてゐる紙が散つて仕方がないのだ。かぜは何處どこからも吹き込まないのに、このやうに、紙が散つて仕方がないのだ。

お前はあの砂原を知つてゐるだらう、涯はしもない砂原を。かぜが来ると、ちりぢりになる砂の粒を。あすこを歩いてゐると、砂が足から逃げる。絶えず、ふしぎな音が足もとから起る。耳を澄すと、あの音のなかに何か、分れ分れになつた澤山の音が一緒になつてゐる、——さう思ふ。病氣のとき、お前の手を引いてわたしは砂の上を歩いたことがある。お前はいつか泣き出してゐた。それを知らずに、わたしはずんずん歩いてゐた。その頃、お前と一緒にゐた。一